

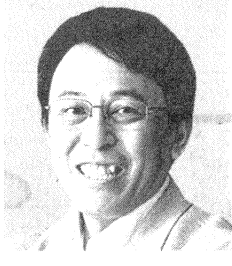
Dr. 和の町医者日記



「親の介護」シリーズ①

今回から8回にわたり、「親の介護シリーズ」になります。私は今月で58歳になりますが、最近どこに行っても、私が医者だと分かれると尋ねられるのはただひとつ。親の認知症や介護に関する質問ばかりです。

私の世代の親といえば皆、80〜90代。寿命が近づき、介護が必要な世代です。そこで今回、「親の介護」と銘打ちました。子供世代はもちろん、親世代の方にもぜひ読んでいただいて、記事のコピーして、自分の子供やお孫さんに渡してほしい。そんな願いを込めて書くことと思います。



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る、総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学、東京医科大学客員教授。57歳。

2025年問題 2025(平成37)年ごろ、団塊の世代が75歳以上に達し、社会保障費の急増が懸念されること。37年の高齢者人口は、約3600万人(人口比約30%)に達すると推計される。

2回の東京五輪と高齢者

2025年問題とは

「私はもう死んでいるわ」。そんな後期高齢者の声が聞こえてきそうですが、その時には、現在の子供世代が高齢者になっています。つまり「多死社会」とは、現在の子供世代にとって、親世代の話というより、自分自身の問題でもあるのです。そこで聞きます。現在、50〜60代の皆さんは、その時にほけていない自信はありますか。「自信がある」と答えたなら、その人はもしかしたら既にほけているかもしれません(笑)。

多死社会では、おそらく高齢者の3人の1人、いや2人に1人がほけていると予測されています。そんな時代に、これまでの急性期病院中心の医療のまま、果たしていいのでしょうか。

年の数に比例して病気の数も増えますが、治せない病気だらけになります。医療も日進月歩ですが、数の試算から言っても到底対応できません。大ざっぱに言えば、前の東京五輪と、次の東京五輪では、日本社会の構造はまったく違うものになるのです。

後期高齢者が10倍に増える一方、それを支える現役世代は超先細り。しかし、「お先真っ暗」という話をしたいわけではありません。その逆で「お先も大丈夫ですよ」という話をしたいきます。とにかく、われわれは前人未踏の世界に突入するということこそ、覚えておいてください。

思い返せば、前回の東京五輪が開催された1964(昭和39)年、私は小学1年生でした。75歳以上の後期高齢者の人口を比べると、前回の五輪時の200万人から2200万人と、一挙に10倍以上に増えます。人類史上、誰も経験したことがない超高齢社会という時代をわれわれ日本人は生き抜くことになるのです。

さて、「2025年問題」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。東京五輪の5年後のお話です。2025年問題とは、団塊の世代全員が後期高齢者となり、言葉は悪いですが、「死にぞき」を迎える時代です。現在、年間約120万人がお亡くなりになっていますが、その数が160万人以上に増えることとなります。それを「多死社会」と呼びます。

正確には、そのピークは2032(平成44)〜2036(平成48)年ごろになるようです。